

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	王朝時代の一偉人：論説
Author(s)	黛南
Citation	龍南會雜誌， 1 2 3： 1 9 - 3 7
Issue date	1907-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6071">http://hdl.handle.net/2298/6071</a>
Right	

は、其社會丈に限られた事で、五百年來の好尚を變ずる程、一般國民に對して勢力のあつた者でない。或は、謡曲のある者は、これら緇徒の手にあつたと思はれるから、自分等と詩風の違ふ白樂天を輕侮して、こんと曲を作つたのではあいかと考へられ様が、それならば、謡曲得右の形式で、且つ自分共が職分である尊い僧侶を出せばよいので、何も宗旨違ひの住吉明社をかつぎまわるには當らあいではないか。それ故に、この詩風の變遷だけでは、到底この『白樂天』の思想は説明出來ないのである。いふ迄もなく、文學ごとにかく劇的に出來てゐるものは、國民精神に投合すべき性質を持つてゐるものであつて、國民はなほ白樂天は一大詩宗と信じつゐる時に於て、かゝる作の流行を來たすのは、決して一二文學者の能事ではあいのてある。

## 王朝時代の一偉人

### (一)

黨

南

史家は皇紀一千四百八十年より、一千五百九十年の間、凡二百年を稱して、藤原氏專制時代と云ふ。藤原氏とは何ぞや、神代大古の邈焉たるものは措いて問はず、人皇五十六代孝徳の朝、太子中大兄と共に、權奸入鹿大臣を誅し、始めて廟廊樞要の大官を贏ち得たる、鎌足大織冠は則ち其の祖たり。忠誠を以て經となし、勇武を以て緯とあしたる彼豈後世數百年にして、彼自らの後昆が驕奢專横上天子を挾むて、重器大統を左右し、後世史家の所謂藤原氏專制時代と稱呼を荷ひ得たるを想はん

や。而も濁流滔々遙かに海洋に朝する大江も、其源は乃ち精溪を走る晶玲の水。明徹鑑すべし。造化の理法人事自然兩つ乍ら其處に何等偏頗のありて存すと云はんや、藤氏後代の然る所以素より必然的經路あらんのみ。

洵や山河千里國、皇居の壯を睹ずんば、以て天子の尊を知るに由なし。寧樂貓額の地、素是れ候伯に價するのみ。邦畿千里斯民を濟ひ斯土を治めんとす。天子萬乗の居は須らく地勢の要に據りて、四海の正中に位せざる可からず、帝桓武、天資英邁大才也。登極日ならず猫額寧樂の地を棄て、好麗明媚山河の勝を擁し林壑の美を包める、平安山城の樞を選むで奠都せるもの決して偶然にあらざる也。東西千五百丈南北千七百丈儼然たる規模の壯而して殿樓宮闕の雄。實に前古を空ふして立つ。爰に於てか紀綱一代に張り威武中外に敷き、萬乘天子の實始めて備る。九夷八蠻獻貢の船、舳艫相望み、東海の蓬瀛州は、一躍して勢威堂々たる一國家を現出しぬ。唯夫れ後帝概ね羸弱纖少父祖の倨に似す。大星一度落ちて又照らさず紀綱再び施廢し、寶鼎漸く錆色あり。遂に臣僚俊兒の乗する處とかり、翩々たる長袖者流をして、徒らに跳梁名を成さしむるの止むなきに及びぬ。

夫れ上に聖天子克明俊德日月の如く臨御すれば即ち止む。苟も不肖剪劣其器に非ず、或は幼冲事理に通せずと云は、其天下命令の權か忽ちにして左右官僚の手中に推移するの事實は極めて自然の成行なりとせざる可からず。況むや歷代の帝子を網羅して、外戚姻親の所縁を保つに於てたや。桓武の後に平城ありと雖父の器に非ず。加ふるに多病蒲柳の質天下を視るに堪えず、踐祚僅々已に讓位退隱す。後世衰運の禍機は早く此時に伏在せるものと云ふべし。以後の諸帝亦多く勝れたるものあ

らず延いて文德清和の朝に及むでは、廢立黜陟の權偏に藤氏の上に存し、帝威又振はず。良房の如き生前已に太政大臣とあり、攝政補弼の臣に任じ、子基經に至りては威令遠く一代を抜き、萬乘の至尊にして猶且其鼻息を窺ふの痛事あり若し夫れ吾人が捕へ來つたる御堂關白藤道長とは果して何人ぞ。吾人をして暫く見る所のものを以て言はしめん乎。

## (二)

螺鈿の細太刀華かに、春は嵐峽落花の雪に、絃歌風流の名残をぞめ、秋は高雄の唐錦夕日に映ゆる折柄の紅葉を翳しては、限なき雲情月意の興を寄せ、冬はいざ玉簾高くかゝげて遠く香爐峰の逸事を偲び夏來れば卯の花月夜をこともなく焦れ出で、今一聲の郭公聞かまほしさに夜の明くるをも知らず。櫻かざして今日も暮せる大宮人の宴安歡歡の興懷はげに何時果つべしと思はれず。萩の下露踏みわけて妹が垣根に果敢なき一夜の契を結ぶもあれば、弘徽殿のあたり朧の月に二千里外の情人を想ふもあり。凡そ此時代の雲郷月客、日夕事とするものは、男女相愛の情交に非ずんば、歌絃吟誦のすさびなり。其生命とする處は風流韻事にありて、天下國家にあらず此を以て藝林の花は夙に麗はくき色に開き、彬々たる文筆の尤は吾が明治時代を措いて殆ど空前絶後ありき。唯見る才子名媛雲の如くに集り、千紫萬紅一時に妍を鬪はすの觀あるを、而して男女倫常の頽廢亦此時より甚だしきはなく、一人にして數妻を蓄へ一婦にして數夫に見ゆるが如き、敢て珍らしとせず。彼の源氏五十四帖は、直ちに是れ當時一幅の縮寫圖たるべきもの、淫風爛俗滔々として風をあすや、浮華輕佻嚴正ある道義的觀念の如き蕩然地を拂つて空しく、父子兄弟互に垣に相闔き近親同族稍もす

れば、反目嫉視するも人以て怪じとあさず。構陷排擠又尋常の事のみ。遠く之を望めば和煦たる春光融々として太平の氣象鬱然たる如きも就て之を檢するに及むでは盡く是れ紛々たる、權力爭奪の陋巷に過ぎず。此間に生れ此間に人となりたる、藤道長が豪華縱横一代の盛を恣にし、古今の逸樂を極めたるもの寧ろ當然の事とすべし。

然れども徒らに狂花痴蝶の迷夢に甘酔せる、當時の藤門白哲の子弟間にありて、彼は確かに一異采を放ちたり。人物ありき。彼が全身の血肉は、常に紫粉紅膩の香薫のみに非ず、實に遠祖大織冠の面影を傳へ、空しく折花攀柳の巷にのみ焦れ暮すには余りに硬骨剛健ありき。風流の道に暗からざりし彼は同時に弓馬の術に秀でたりき。殊に其器度膽識宛然たる一個武人の態あり。兄弟數人の間、獨り其選を異にして一頭地を抜く榮華の記者は先づ彼が壯時の狀を述べて曰

「五郎君(道長)三位中將にて御がたちよりはじめ御心さまかど、先君たちを、いかに見奉りおぼすにかあらん、引きたがへさまざまいみじうらうしう、をうしう道心もたはしわか御方に心せよある人あごを、心ことに思し願みはうませ給へり。御心さますべてよのつねをらず、たぐひあるべきとも見わたまはずものゝ給ふ、後の宮もとりわき思ひ聞わ給ひて、わかふときこねて給ひて心ことに何事もたもひ聞わさせたまへり云々又

『只今御年二十ばかりにたはするにたはふれにあたりしきた心あり、それはわか心のまめやかあるにもあらねども、人に恨みられし、女につらしと思はれんやうに心苦しかへい事こそおげれかごたばしてたばろげに思す人にそいみじう忍びて物あごものたまひける云々(榮華様々の悦の巻)』

惟ふに彼が胸中密かに蓄へたる野心の爪牙は、決して尋常ならず、自ら抑損韜晦して敢て妄に鋒鏑を露出せず。巧に人心を收攬して除に機連の到來を俟つが如き豈徒らに血の氣のみ勝ちたる當時の白面執袴者流の、能くする所あらんや。果然中宮詮子の心は動きたり。榮華の同じ卷に

「この左京太夫殿その御局の人によく語らいつき玉ひて、さるべきにやあらん、むつまじうあらたまひければ、宮もこの君はたはやすく人に物などいはぬ人あれば、あへあんといゆるしきこそさせ玉ひて、さるべきさまにもてあさせ玉へば、わか御志もたもひ聞ゆ玉ふうち、宮の御心もちらひも憚り思されてたろかあらず、思されありわたり玉ふ。」

と云へるものにて如何に彼が人心籠絡の術に長じ後日雄飛の準備に怠りなかりかを想見すべし。みならず單純なる時人も亦忽ち彼が爲に術中の人となりぬ賛じて曰

「只今に御位もあるが中にいとあさく御年あども萬の御とうとにればすれど、いかなるふしをか見奉るらん、世人のこの三位殿をやんごとあきものにぞ同じ子の御中にも、人ことにまし思ひたる」と

然れども是れ決して一片巷間の浮説にのみ止らず、事實に於て彼は正しく兄弟間の白眉たりとあり夫れ將を得むと欲するものは先づ其馬を射ざる可からず。天下を望むものは當さに先づ其人心の向背を定むべし。昔は王莽謙抑士に下りその徳を頌表するもの四十八万人遂に一時の帝王を稱せり。今や道長能く其跡を襲いて畧成るに庶幾し。而も彼が胸中全幅の抱負を充さんには猶幾多の山越ねざる可からず、水渉らざる可からず。知らず腦裡畫き出す彼が慘怛苦心の策や何。

## (三)

由來臣子の分を以て、權榮尊貴の極に坐し、政權の樞要を攬りて、傲然天下萬億に號令せんとするものは、必ず先づ至尊の神器を挾むで其背景となすを普通とす。古今權臣の跡概ね然らざるはなし。而して天子の器を挾まんと欲すれば、勢之と最も親近の關係を結ばざる可からず。然らば其所謂親近の關係を結ぶの策は如何。解答は容易也曰其生む所の女を以て君王に捧ぐるにあり、后宮に入納せしむるにあり、已にして女、帝の思寵を荷ひ、花情月意、鴛鴦の契濃かあれば既に其計謀の一半は成就したるあり。聽て龍體をうけて皇子を生み、更に進むで其皇子にして東宮となり皇緒を嗣ぐに至れば、其所望は全く達せられたるなり。所謂外戚の權あるもの即ち是あり。由來機慧才敏の藤道長豈這般平明の理を知らずと云はんや。而して時は漸く熟せんとせり。榮華様々の卷の一章を見ずや

「かゝる程に左京大夫殿の上(倫子)けしきだちて惱まう……殊にいどうも惱ませ玉はでめでたき女君(彰子)生れ玉ひぬこの御一家には始めて女生れたもうを必ず后がねどいみじき事に思へれば……いと三位殿は思わくるかたのうれもるまじげに過ぎさせたまふ」と

知るべし彼が衷心の愉悅如何に禁じ能はざりしかを。第一女名は彰子長するに及むで風姿楚楚真に傾國の態あり。九重簾裡君寵の厚きを負ふに餘りあるもの。當時平安朝時代にありて美人たる第一條件は、其頭髮の麗はしきにあり。頭髮にして美ならざらんか如何に畫眉柳腰妖艶の人を魅するものあるも遂に第二位以下に下らざる可からず、翻つて彰子を見る天乎、たばねば長き緑の黒髪は甍

々として地に餘る事正に五六寸。父祖の光霽を戴いて十分あるうしろみを有せる彼は亦更に女性として最高の誇たる美人たるの資格をも併せ有す。眞に多幸ある哉。耀く桐壺の一卷は實に彼女が半生富貴の榮華史あり。惟ふに此時道長の歡喜や蓋し龍領の珠玉を獲たる以上なるべかりしからん。蛟龍遂に地中のものにあらず今や風雲正に湧き、昇天霧遊の大機は迫りぬ。道長何を躊躇事を空しくせん長保元年十一月一日彰子は裝花々々禁中の人となりぬ。

是より先き道隆の女定子中宮として龍坐に侍す。又是れ一代の佳麗、加ふるに貞淑溫雅誠に君子の好述たり。故を以て帝意大に傾き相思の情綿々たるものありき。彰子の入内ありを雖多く帝の心を移すに至らず、寵遇稍もすれば彰子の上にいで道長等頗る不平ありきと雖又之を奈何ともする能はざりき。而も幸運の影は何處までも道長に纏ひて可憐の定子は積る憂愁の數々にそか小さき心を傷けられ、青春二十五才を以て香魂長に鳥邊野の煙と消ね失せぬ。爰に於てか道長積目の苦心一朝にして止み禁中唯桐壺の耀けるあるのみ。かくて大鏡に曰

「第一の女君は一條院の御時に長保元年十一月一日、御年十二にて女御にまゐらせ給ふ。ぬのと長保二年かのね二月廿五日十三にて后にたせ玉ひて中宮と申くはごにうちつゝきをどこみこ二人うみ奉り給へりしこそは、今のみかど、東宮にたはしますめれ。されば二所の御母后太皇太后宮と申て天下第一の母にてればす」と

呼鳴太皇太后宮にして、天下第一の母は即ち道長の女なり帝後一條後朱雀はその外孫たり、春日明神の神光今や鍾めて道長の一身にあり。陸離たる光彩門戸に坐じ坐天下の父母をして男を生むを重



むせすゝて、女を生むを重むせゝむるに至る。若く夫れ紆餘縈回元として立つ嶢嶢の山、登は即ち大に苦むへゝと雖、一度其絶巔を盡せば、歸路は平々坦々春川の浴々を下る。か如けんのみ。今や道長己に險關攀ぢ難きを過ぎて絶頂の清風に衣を振ふ。彼岸の萬象唯一呼應のみ。斯くて幾何もあゝて二女妍子三女威子四女嬉子皆掖庭に入りて中宮たり國母陛下の榮稱を荷ふ。道長の野望爰に於て全く其言に讀み及びたるなり。

## (四)

嚴乎たる宇宙の大法と全然無關係にして而も之と同一の權威を有せる奇しき命運の羈絆は永劫の過去世より、久遠の未來世を通じて、長へに人間小智の傀儡師なり。あらゆる時間と空間との上に超越して、不可思議の巨掌を揮つて榮辱好惡を恣にする事古今軌同一。觀じ來れば我藤道長の如き寔に巨怪命運の一大寵兒たるの觀あくんばあらざるなり。彼が政治的、社會的、地位の昇進は殆どトントン柏子なり。抑彼は素より藤門の正流には相違あゝと雖所謂嫡流の嫡々には非ざるあり。兄弟の關係より云ふも彼は兼家の第五男にして末弟たり。最初の官位は權中納言にして左京太夫たり此時に當り如何に最負目に見るも、誰が後年太政大臣關白の榮職を擁して「望月のかげたる事あし」と傲語するに至るべきを想はんや。思へば幸運の兒ある哉、長徳元年彼が左近衛の大將をかねける年の頃より疫疾俄に流行し、一時の縉紳名流にして且藤園棟梁の材たる郷相の之に仆るゝもの前後幾人あるを知らず。小一條の左大將、の如き六條左大臣の如き栗田右大臣の如き、桃園源中納言の如き、又疫にあらすゝて年を同じくて逝けるものに閑院大納言、中關白道隆あり。斯の如くにして彼

が昇進の行路を遮ぎる可き先輩耆宿は殆ど絶滅し、今は一望萬里の曠野崔嵬たる山影を見ずして唯參差たる花木細條の跡をととむるのみ。天下の事知るべきなり。長徳元年右大臣に任せられたる彼は未だ暮年からずして翌年七月左大臣に累進す稀有の拔進と云ふべし。白帆滿を孕むで順流を下る、太政大臣、關白の如き亦一舉手一投足の勞のみ。況むや彼が器局才幹の之に伴へるあるに於てをや。遮莫由來喬木は陌風の爲に惱まざる。彼が異數の榮進を以て衷心甚だ快からず、密かに巧むで之を阻格せんとせるも又少くとせず。然れ共此輩概ね斗筭の俗、徒らに暗中人に背いて妄りに隙々を敢てするも、堂々公然たる態度に出で、雌雄を一時に決すると云ふが如きは到底彼等が夢想だもあし能はざりし處なり。優柔媚悅髯の生わたるた姫様の骨は精悍武人の風ある道長に對せんには餘りに軟かなりき。餘りに羸弱なりき、智略と云ひ膽識と云ひ苟も一黨一派の領袖たるべき要素に至つては全然彼等には缺焉たりき。否斯の如きは雕蟲琢魚の小技にのみ執着せる彼等には何等の權威にも價せざりしなり。獨り女の腐りたるが如き彼等の間に立ちて多少の頭角を擢むで、稍道長の敵とするに足るべきものは藤伊周一人のみなりき。彼は中關白道隆の二郎君にして、道長とは實に叔甥の間柄なり。然れ共名利と權勢の前には何等道義の觀念なき當時にありて叔甥の反目爭鬪は寧ろ日常の些事たりき。彼幼にして穎悟、才學時流を壓したりき故を以て其漸く長するに従つてや臺閣廊廟の顯榮は日夜其軫念する處たり。門地高き彼は年齢廿一の弱冠を以てして早くも内大臣の重職を擁し得たり。長徳二年父道隆病むで暫く朝をやむるに及び、代つて天下及百官内覽執行の權を握る、事實上關白の大權は殆ど彼か手中に委ねられんとする、一轉瞬命運の恩寵は彼を棄て、可惜掌

中の珠玉は思はぬ人の手に渡り、道兼關白とありぬ「手にすゑたる鷹をそらひたらん様にあげかせ玉ふ」と云へるもの又無理ならぬ事と云ふべし。一脉の東風に春心將きに動かんとせし蕾の花は再び怨むべき夜半の嵐に散り失せぬ。而して幾何もなくして關白道兼の薨するや又もや中原の鹿は他に向つて走りぬ。道長に忠ある榮華の記者は這般の消息を洩らして曰

「この粟田殿の御事の後より五月十一日にぞ左大將(道長)天下及び百官執行といふ宣旨下りて、今は關白殿と聞わざせて、又あらぶ人なき御ありさまあり、女院(詮子)も昔より御志取りわき聞わざせ給へりし事あれば年頃の本意ありと思し召たり」と

蔭ける種は生ねざる可からず、嘗て御局の人々よく語らいつきてさるへきにやあらんむつまじうなり玉ひたる用意の周到は爰に到つて果して効あり。而も一度得むとして失ひ再び捕へんとして逸したる伊周の鬱々たる煩悶の情は之を察するに難からず。煩悶展轉の結果は遂に恐るべき理路を離れたる狂痴の巷に彼を驅りぬ、榮華見はてぬ夢の第一章は忌憚あく失意の伊周を叙述せり曰

「この内大臣殿は粟田殿のありさまにならひて、この度もいかでかと思すぞをこかりける。さりとともまたのもしうて、二位の御いのりたゆまぬさまなり。世の中さがら押し移りにけり。内大臣殿世の中をいみじう思ふ嘆きければ、御叔父ともや、二位(成忠)なぞ何かはたばす、今は唯御命だにたまたせ給はゞ何事かを御覽せざらん、いであをこや老法師(成忠)世に侍らん限りは」とたのもしげに聞ゆればさりとともと思すべし。」

見よ意地悪き命運の暴手に訶まれて、輾轉不遇悶々の情遣る方なく、僅かに一時的なる御爲ごか

の氣安め言にも、猶強いて、前途に一縷の光明を望まんとす憐むへき哉。況むや身は是れ堂々たる攝関の家に人とあり乍ら、婦女狡童の事とすべき呪咀祈禱の狂戯を敢てして只管野心の満足を求めんとす、彼毫せる乎將乱せ乎。甚だしい哉富貴に眩惑せる事や。

## (五)

狂痴乱態、彼の秋雨の斷續して連日開かず、暗憺として冥黝の間に彷徨せる伊周の近狀に對し、道長の態度は實に紫霓斜めに半天に横るの處將軍鞍へ凭て左右を顧眄する概あり鷹揚闊歩除るに社會事相の經路を察し悠然として胸中の成竹已に成る、伊周にして已に斯の如し今や天下の事多く憂ふるに足るものあり。他群小阿附の鼠輩必竟何するものぞ、彼の眼中今や一世を空しうして立つ。思ふて行はれざるなく呼むで答へざるなし。寔に猛虎深山に吼ゆるとき百獸盡皆伏俛尾するが如し。憐むべし一再からず事常に志と違ひ、悲觀につくに悲觀を以てせる伊周は爰に到つて殆ど恒心常識の存在を失ひ日本に勝れたらしその才も今は用ふるに處かく茫々たる天他の間孤影孑然落魄沈淪の果は只一個賤むへき戀の奴とあり丁り、弓矢を以て龍体を冒すの不倫大逆を敢するに至りぬ。罪條は明白なり。罪あるものは罰せるべからず

大上天皇ころし奉らんとしたる罪。

御門(一條)の御母后(詮子)を呪はせ玉ひたる罪

ねとやけより外の人いまた行はざる大元の法を私に隠し行はせたる罪

以上の三罪は遂に彼を驅つて西陲路遙がある、筑紫の果に遠流貶謫せられざるべからざる破滅と陷

らしめたり。昔は菅丞相罪からぬ罪に坐して同じく太宰の里に無念の恨涙を吞めり。今は伊周惡むべき弑逆の大罪に悔恨の涙知らず何に向つてか灑がんとはする。隙間洩る風、板屋打つ霰、朝霞夕照、何れか昔思ふのよすがにはあらざりける。關外秋寒くして旅雁雲に叫ぶの夜、八重葎葉未に宿す月影を眺めては、肌薄き衣の袖あはれ幾度かぬれまさりけん。さはれ藻にすむ虫のわれから求めく身の歎きさりとては又人やつれなき、物やかたき。

翌年特赦の令は下りぬ。彼は再び龍殿鳳闕の人となりぬ、されど此時の彼は當年の彼とは全く別人なりき。主觀的に於ても客觀的に於ても。換言すれば嘗て一門の榮華に誇りて、中原逐鹿の場に馳騁せし意氣や、抱負や、今將た何處にかある。ましてやあふさきさるさの口善惡なき殿上人の嗤笑譏謔は、いやが上にも彼が心を痛ましくめて、枯槁焦衰又昔光源氏の面影あらず。思へば世はまこと邯鄲の一夢ありけり。落日を返す道長の隆々たる勢威は彼が仰いで眩耀に堪へざる處、されど今將た之を奈何。山河千里國只藤道長の濶歩縱橫の獨擅場に任せたり。英雄遂に並ひ立たざる乎。

寛弘二年正月廿五日あらぬとりくの名を京童の惡口に唄はれつゝ、悲痛の中に彼は恨を吞むで逝きぬ年紀三十七

「……に只今いとかくもたはしますまじき程にかくはあきさまにかり玉ひぬれば、年頃さりともの御たのみに、萬心のどかに思しわたりけるを、中宮(彰子)の若宮(後一條)今宮(後朱雀)さしつゝきて、月日の如くに光りいで玉へるに、すべてすぢなく、今はかくにこそと、わばしつるに御病もつゝ御命もつゝめてけるにや。」

是れ榮華の記者か彼か薨去の折の事を書ける一節あり。齡未だ不惑に到らずして蹉跎陸沈素望空しく杯土に瘞めて死す。才子薄命の嘆なくむはあらず。遮莫彼は到底當時の所謂才人なりき。徹頭徹尾才の爲に動かされ、支配せられたる人ありき。而も才餘りありて識足らず。徒らに功名に急にして前後の顧慮に違あらず、自家研醜の覺知に至つては全然歛焉たるものありき。彼は到底、事業政治の士あらずして、風流文筆の人ありき。單純ある貴公子的觀想と、空論的學問上の智識とのみによりて、複雑ある人事問題の解決を試みんとしたるは、是彼が凡ての方面に於て成功せざりし所以あり。要之彼は未だ人生の眞意義を捕へず輕浮ある、皮相的觀察を基礎として不逞の慾を充たさんどしたりしあり。已れ蒔きたる稻は已れ亦之を刈らざる可からず。後年の失意沈淪は正しく自家の招致せる罪たるを思はずや。而して是れやがて一般當時の時代的傾向には非ざりしか。之に反して藤道長は如何、彼は伊周か才の人なるに比し膽の人ありき。學の人あるに比し略の人ありき。而して伊周が神經質的あるに反し膽汁質的なりき。情の人あるに反し理の人ありき伊周が直情徑行稍もすれば馬車馬的あるに反し、迂餘曲折悠々として洪河の瀉々たるか如くなりき。之を綜合すれば二者互に物の兩末に沿うて進まんとしたるものにして前者は文學者肌、後者は政治家肌ありき。伊周か情の人、才の人として道を誤れるに取り政治的壇場に容喙せんとせるは正しく彼が失敗せる所以にして同時に道長が膽の人略の人として能く本領を失はず、終始一貫なりしは偶以て彼が成功せる所以なり。若し夫れ伊周をして其才専ら學問詩歌にのみ止らしめば、公任行成、亦決して望み得へからざりしにあらざりけんを。彼が爲に惜むべき限なり。所詮世間的一切の伎倆於ては伊周到

底道長の敵に非ざるなり。而も當時にありては道長は寧ろ異分者あるの觀を存じ伊周を以て禁典型的人物と見るべきに似たり。道長が成功の因又少からず這般の消息に存す、嘗て幸運天の冥祐ありてのみ然りと云はんや。

## (六)

曩祖春日明神の系統を嗣ぎて、器宇局量優に一代政治家的、武將的性格を具有せる彼は、又其一面に於て風流韻事詩歌の道に疎からず。能く時代精神の潮流を容るの雅量を伴へり大鏡に載する處の殿、ことにふれてあつてはせの詩歌あぞ居易や赤人、人丸、みつね、つらゆき、といふも、思ひよらざりけんところねは侍れ」

とあるもの幾分の諛辭過褒當らざるものあるべしと雖、又以て彼が斯道に於ける造詣が決して平凡以下あらざりしを見るべきあり。

抑本朝文學美術の盛を稱するもの、必ず先づ指を前に平安朝後に江戸時代に屈す。而して平安朝に於ける黄金時代は取も直さず道長執政時代に非ずして何ぞや。本邦國文學の作物を通じて其質に於て將た量に於て、最も優秀の地歩を占め萬綠叢中一頭地を抜けるものは源氏物語なり。其他奇警華膽を以て殆ど源語と駢馳せんとする枕草紙の如き、又實に此時代の一大產物なり。獨り此等文學的產物のみならず、建築の如き、音樂の如き、濟々たる多士、實に十指に遑あらず、前后人才の輩出此時より盛あるはなし。彼の一條帝が自ら賛して「朕が代敢て誇るに足るものなし只人材の輩出せるあるのみ」と云へるもの寔に誣言にあらざるあり。是れ素より一は時代の要求に伴ひて、發生せ

る現象ありとすべきも、又以て時の關白藤道長が、陰に陽に推奨、助成したる餘慶ならずとせんや。碩儒大江匡衡をして

「左相府尊、閣希代榮貴之器也、居戚理爲王者之親舅、入法門爲如來之弟子、遊文場爲花月之王、在朝廷爲社稷之臣、外孫則鳳作皇子、聖日照帝梧之枝、男長則龍作納言、家風期台槐之葉、以薦賢爲己任、以弘經爲身謀、夫秋尊之世、焉爲一佛乘也、相府之仕朝焉亦爲一佛乘也」

と頌言せしめ一代の才人公任をして

「今よりは君が御蔭をたのむかな雲かくれに月を戀ひつゝ」

と哀願せしめたる如き或は又古今の名媛藤式部を聘して、中宮彰子に侍せしめたる如き、素より匡衡と云ひ公任と云ひ才藻溫蓄一流の大家ありと雖、機根鈍劣常に富貴に戀々として徒らに清詭攀縁を希ひ、妄りに美辭を運ねて榮達推舉を欲するもの、その言の全豹をあげて、一般を推さんは少く虚妄輕擧に失すべきも兎に角、當時著名の文人學者が概ね道長の門に倚りて、其知遇恩顧を蒙らんと欲せしは争ふべからざるものなりとす。而して道長が能く是等の多くを包擁して、發育せしめたりし事、則ら文華燦然として四方に輝きたる所以也。

若し夫れ彼が全幅の希望を傾け、且普く天下の富を盡して、造營したる御堂、法成寺建立が如何に宏壯華麗一代の耳目を聳動したりかは、能く榮華玉の臺の卷に詳述せる所試に其一部を抄く見む乎曰

「日々に多くの宮遠大臣上遠印さるべき人に参りまかで立ちこむ。さるべ殿ばら來はしめ奉りて



宮々の御封御莊ともよし一同に五六百人千人の夫どもを奉るも人の數にはがる事をばかしこき事にれはうたち國々の守ども地子、官物はれそかはれども只今はこの御堂の夫役、材木檜皮、瓦なと、多く參らするわさを我もく競ひ仕らまへる、大方近きも遠きも參りこみて、品々方々のありくにつかまつる或所を見れば御佛つかうまつるとて佛師ども百人ばかりなみ居て住まつる同くはこれこそめてたけれど見ゆ御堂の上を見あくれば匠工ども二三百人のぼり居て大きな木どもには大きな綱をつけて聲を合せてなささと引き上げさはぐ。

御堂の内を見れば佛の御坐つくりかゝやかす板敷見れば木賊様の葉、桃のさねなどして四五十人手ごとにあみゐて磨き拭ふ檜皮、萱壁塗瓦作なども數を盡くむる又年老いたる翁などの三尺ばかりの石を心に任せて切りとくのふるものあり池を堀るとて四五百人松のたち山と疊むとて五六百人のぼりたち又大路の方を見れば力車にゐるも云はぬ大木ともに綱をつけて叫ひのよじり引きもてのぼるあり暢河の方を見れば筏といふものに檜材木を入れて棹さして心ちよけに誂のくくりもてのぼるめり大津梅津の心ちするも西は東といふるは之ありけりと見ゆ磐石といふばかりの石をはかふき筏にのせ率て來れどしつまずすべていろく様々いひつくくまねいやる方なしかの須遠長者の祇園精舎造りけんもかゝやありけんと見ゆるを冬の室夏の風名ことくなり」と

以て其一般を察知すべきなり。彼の基經の極樂寺忠平の法性寺、師輔の楞嚴院、兼家の法興院、爲光の法隆寺、道隆の積善寺等、歷代藤氏の先考、三法に歸依して名寺巨刹の造營珍らしとせずと雖之を道長の建立せる法成寺に比す、規模の小、色彩の素を覺えずんばあらざるあり。惜むらくは一

朝祝融氏の災をうけてさうも名利も、唯一片の灰燼と化つたりし事を

## (七)

さうもに榮華を極めて、日月の双懸を仰かしめたる、道長も今や齡五旬に餘り鬢髮漸く白を數ふるに至り意氣又舊の如くからず。依て寛仁三年、攝政關白の大權を解きて長子頼通に譲り、其骸骨を以て菩提沙門の道に入りぬ。唯卒然として之を見れば、如何にも高蹈勇退富貴に執着せず、閑雲野鶴能く其一身を處するの道を知れるか如しと雖、肚皮裡更に一段の精察を加ふるとき、彼の遁世脱俗が、必ずしも老來世務に堪わざるを覺わたるか爲のみに非ざる可きを見る。何ぞや惟ふに彼や性極めて放膽なるか如くにして、而も頗る細心なる所あり。彼は能く過去を知るの人たると共に又現在及未來をも併せ考ふるの人あり。此場合に於て彼の本領は比較的遠大の計謀を廻らして沃肥好良あるその美田を子孫後代に貽さんとするにあり。換言すれば子々孫々輝く寵榮光霽に酔ひ權榮を自家一門の間に鬻斷せんと欲したるなり。人生五十を以て極限とすと雖、意力拔群霸氣翕勃たるものにありては、五旬の類齡猶決して老いたりとせず寧ろ客氣全く沈靜して、人生老熟の佳期たるへきを思ふ。加之當時にありて剃髮佛門の人となれば一切現世の事類との絶縁を意味するものに非ずして唯一種の習俗的流行に外ならず。俗界に於けるその勢力は、何等の變化をうくる事なく。故に彼が長子頼通未だ弱冠にして世故風塵に傲はす、心頗る難色ありたるに拘らず、強て其攝關の大權を彼が頭上に冠せしめたるものは、若く中途不幸にして已れ死するありとせんか、恐らく攝關の大權は自家以外の門に向つて、稚移すべし是れ到底彼の堪へ得る所に非ず若かす生前眼の黒き間

に、百年後の煩いからしめんにはどの深意に出でたるものにあらざるあきか。慧敏にして世相の眞を洞察し、心常に功名を離れざる、道長が生涯の歴史を通觀すれば壺中の消息自ら釋然たるものあらん。而も更に吾人はこの説を一層明かからしめんか爲に榮華疑の卷の一節を借り來らん曰

「……今年五十四なり死ぬとも、更に耻あるまじ、令行末もかばかりの事はあり難くやあらん、唯飽かぬ事は尙侍(嬉子)を東宮(後朱雀)に奉り、皇太后(研子)の二の宮(禎子)の御有様とこの二事をせすありぬることあれど、大宮(彰子)にはしまし攝政(頼通)の大臣いますれば、さりともし玉ふことあらん」と

口にくそ攝政中宮のいますればさりともし玉ふ事のあらんとは云へ彼は其心中頼通彰子の聲望威令か到底自己のそれに及ふ能はざるを看破せる記中尙侍、一の宮の事、之を其在時中に果さずんば、百年の後、成敗の事未だ知るべからず。病壽の間猶懊惱呻吟の情を洩らせるもの寔に所以あり。然れども幾回もかくして彼が苦心は酬ひられぬ、尙侍は故障かく後朱雀の後となり、一の宮又入りて後三條の母となりぬ。呼嗚此時此場合彼に非ざるも豈誰か「この世をばわが世とぞたもふ望月の欠けたる事のあしと思へば」の傲語なからるざものぞ。

## (八)

今や吾人は擱筆の場合に迫りぬ。顧みて彼か一代の歴史を觀るに、總て是れ富貴光榮の歴史あり。多幸多福の歴史あり。人或は其閱歷餘りに平和に過ぎ、巒峯起伏長風倒まに紫瀾を捲く底の、變化に乏しきを云ふものありと雖、而も其滿腹の經綸を傾け盡して豪華壯遊一世の歡樂を恣にし天上天

下獨尊の盛を唄はしめたる行事に至つては眞に古今唯彼あるのみ。若し夫れ彼が積年の抱負を伸べんとして專擅妄に十善の天子を威壓し強て其我意を逞くうせる跡あるか如き、嚴格偏狹なる舊道徳舊習慣を借らざるも猶無禮不遜の罪、鼓を鳴らして攻むべきものあるは吾人と雖且之を知る。獨り窮屈なる倫理道徳の假面を脱して、天真赤裸々の態を持せざるこそ豪邁果斷大膽に忌憚なく情緒の自由を恣にしたる天馬空を駛るの彼が行動は自ら一道颯爽浩浩の氣磅礴として吾人に逼るものあるを覺ゆんはあらず。藤門由來人才に乏くからず雖彼の如きは其全部を通じて遙かに傑出す。沙中の眞金乎。惜むらくは彼が生涯の行路餘りに風波なく、十分ある彼が眞實を發揚せしむるに足らざりし事。

かくて萬壽四年十二月四日、王朝時代の一巨人は溘焉として眠るか如く、六十有二の高齡を以てきぬ。此時天に音樂聞ゆ、瓊珞の韻珊々たりきといふ。(完)

(十一月三十日)

歳臘我亦俗務多く加ふるに時日切迫の爲此篇未だ腹稿の半をも盡さず唯其アウトラインを描けるに過ぎず。評は即ち他日の春陽を俟たん幸諒焉